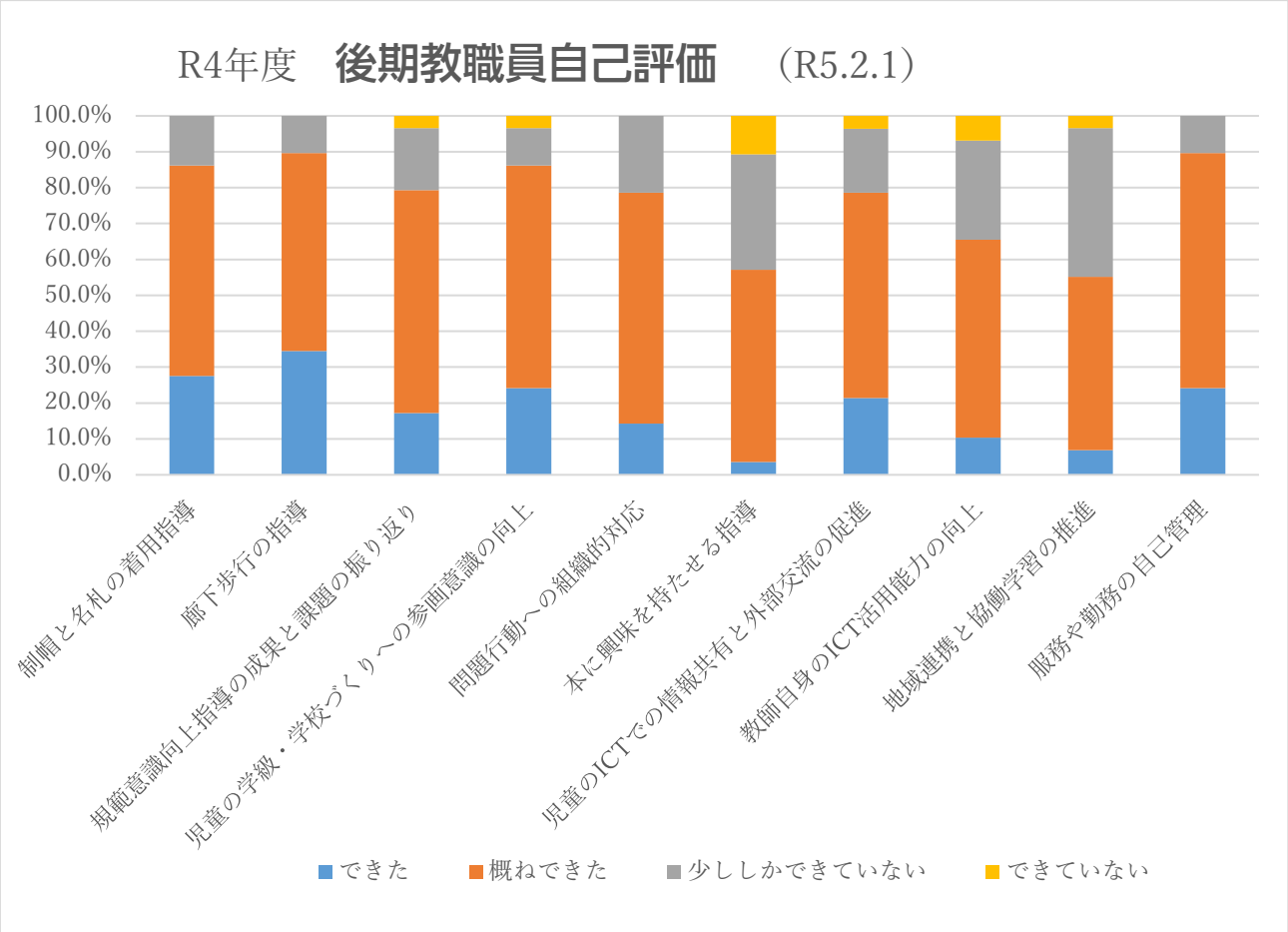
＜令和4年度　後期　教職員自己評価＞



1、こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ

(1) 制帽を着用して登校すること、校内では名札を付けることを指導し、「できた」「概ねできた」と回答する子どもを70%以上にする。

制帽着用率				
	1/31（火）	達成	2/1（水）	達成
1年生	93.0%	○	96.9%	○
2年生	97.4%	○	93.5%	○
3年生	95.2%	○	96.5%	○
4年生	65.6%		76.8%	○
5年生	75.0%	○	80.0%	○
6年生	65.6%		57.9%	

名札着用率				
	1/31（火）	達成	2/1（水）	達成
1年生	88.7%	○	94.9%	○
2年生	97.4%	○	94.8%	○
3年生	95.2%	○	95.3%	○
4年生	61.5%		69.5%	
5年生	81.5%	○	85.3%	○
6年生	77.8%	○	80.4%	○

この設問に「できた」「概ねできた」と回答した教職員は86.2%でした。児童アンケートでも83.2%の子どもが肯定的な回答です。

そこで、制帽着用率を調べた結果が左の表です。高学年の着用率が低いのですが、低学年は非常に高く、ほとん

どの児童が制帽を被って登校しています。登校時の様子を見ていますと、制帽を着用する児童は年度当初に比べて格段に増えました。教職員の指導の効果が表れていることが分かります。

名札は朝、教室に入った時に保管場所から取って胸に付けるのですが、友だちとおしゃべりしたり提出物を出したりする間に忘れてしまう子もいるようです。左の結果を見ますと、低学年は名札を付ける習慣がきちんとついています。教員による日々の指導の成果だと思いました。しかし、高学年になると、名札や制帽の着用といった基本的な生活習慣が崩れる傾向が見られます。特に自我に目覚める４年生以降は「ルールだから。」と注意して守らせるのではなく、丁寧に説明して指導しなければならないことを実感しました。

(2) 廊下を走ってけが等の事故に至ったり、廊下を雨天時の遊び場にしたりすることがないよう、教職員がそれぞれの立場で右側歩行を指導する。

この設問に「できた」「概ねできた」と回答した教職員は89.7%です。多くの教職員が廊下を走る子どもには「走らない！」ではなく、「歩きましょう。」と声をかけました。否定的な注意の言葉よりも肯定的な表現で、また、歩いている子どもに対しては「歩いてるね。」の確認の言葉で効果があったと教職員は感じています。しかし、子どもたちはその場での指導は聞き入れるのですが、それがなかなか継続できません。そこで、休み時間になると教室の出入り口に立って子どもたちを見守る先生もいました。廊下を走ることで大きなけがにならないよう、絶えず注意を促していきたいと思います。

(3) 「善悪の判断」「正直、誠実」「規則の尊重」についての道徳科の指導を特別支援学級も含めて充実させ、各学期に成果と課題を振り返る。

この設問に「できた」と回答した教職員は前期の 11.1%から17.2%になりました。「概ねできた」と回答した教職員を含めると、79.3%が肯定的な回答をしています。成果（子どもたちの変容）として、

・学級内で同じ問題行動を繰り返すことが少なくなった。
・間違った行動をしたときに、どうすればよかったのかを考えられるようになった。
・善い行いをする児童が増え、それを見習おうとする児童も増えた。
・他人を傷つける言動が少なくなった。思いやりのある言動は増えている。
・1 学期に比べて、ごまかしたり嘘をついたりすることが減った。
・書くことや発表することを通じて、道徳科の学習内容を子どもたちが自分のこととして 考えられるようになった。
・1 学期よりも思いやりを持って友だちと接する子どもが増えた。

課題としては、次のようなことが挙がっています。
・子ども同士がお互いに注意するが、それを素直に聞き合える人間関係作りが必要である。
・被害者意識が強いので、お互い様だということに気づかせる指導が家庭でも学校でも必要である。
・自分さえよければ良いという考え方をする子も多い。

このことを来年度の道徳科指導のポイントとしていきたいと思います。

(4) 友だちや先生に真心を持って接し、協力してよりよい学級や学校を作ろうとしている児童を 80%以上にする。

児童アンケートでは88.7%の児童が「友だちや先生に真心を持って接し、協力してよりよい学級や学校を作ろうとした。」と回答しています。教職員は86.2%が「指導できた」「概ね指導できた」と回答しました。

しかし、教職員からは「バレなければ隠そうとする傾向や、悪いと知りつつ友だちとノリでやってしまう傾向、悪乗りを自画自賛する傾向があるため、継続的な指導が必要である。」という意見がありました。社会的にもここ数年間でこのような人物が増えてきたように感じます。SNS でそれらの行為が拡散され、自制心を欠く行動に唖然とすることは多いのではないでしょうか。本校の子どもたちにもそれが全くないとは言えません。真面目に時間をかけてすることを疎んじる、面白さや不真面目さ、ウケることにだけ目を向ける等、「もうちょっと考えたら分かるはずなのに。」と思うこともしばしばあります。

しかし、高学年が全校児童の前に立つ機会に、その子の良さが開花することを何度か見ることができました。「誰かから見られている」という思いは子どもを伸ばすチャンスです。特に年下の子にお兄ちゃんやお姉ちゃんとして頼られることは喜びであり励みになります。そういったことから、異学年交流を積極的に進める取り組みも今後考えていかなければならないと思いました。

(5) 児童の問題行動への対応を SC や SSW、サポートセンターとともに学校や学年全体で話し合う機会を持ち、教員が「安心して対応できた」と答える割合を 80%以上にする。

この設問に「できた」と回答した教職員は14.3%、「概ねできた」と回答した教職員は64.3%で、合わせると78.6%が肯定的回答をしていますが、目標の80%にはわずかに届きませんでした。教職員が問題行動への対応で困ったことは、

・学校で教員が困っている現状を保護者に伝えても、それが伝わらない。
・教員が子どもの様子を伝えても理解してもらえず、対処の仕方がすれ違う。
・教室から出て戻らない児童を探す際、教室内にいる児童を見る教員がいない。
・保護者の協力がない。
・教員の目が届かない自宅でのタブレット端末の不正利用がある。
・注意するとキレて教師の話を聞こうとしない子がおり、周囲の児童にも迷惑が掛かっている。
・保護者となかなか連絡が取れない。緊急連絡先に電話しても出ない。
・正直に言わない子への対応に困っている。
・教員への罵詈雑言があり、耳に入る言葉が教員のストレスになっている。
・対教師、対児童への暴力行為が減らない。
・特定の教員に対して無視する児童や、理屈が通じず言うことを聞けない児童の指導に困る。

教職員に指導の仕方を助言してもらうことや、保護者に対して学校以外の機関からアドバイスしてもらうことは、これからますます必要になると思われますので、スクール・カウンセラーやスクール・ソーシャル・ワーカー、巡回アドバイザー等、関連機関や専門機関とのつながりを大切にしていかなければならないと思いました。また、暴力行為が減らないということを重く受け止め、暴力は絶対に許されない行為であるということを粘り強く指導していかなければならないと思っています。

(6) 本に興味を持たせ、学校図書室の年間貸出冊数を 15000 冊以上にする。

この設問に「できた」と回答した教職員は前期 20.0%から3.6%に低下しました。「概ねできた」と回答した教職員は 53.3%で前期と変化はありません。よって、肯定的な回答は、前期は 73.3%でしたが、後期は57.1%に減じました。つまり、後期は積極的な読書指導ができなかった、しなかったということになります。教職員は読書指導を学校図書館司書や読書ボランティアに任せきりにしていないかを検討する必要があり

そうです。

学校図書館は学校の臨時休業中も開放日を設定し、参観日や個人懇談日に保護者にも開放しました。日頃ゆっくり選書したり読書したりする機会のない児童は本を読む時間を作れたでしょうか。保護者の皆さんに図書室の様子を知っていただけたでしょうか。

（2 月9日の時点で鹿ノ台小学校図書室の貸出冊数は12083冊です。）

2、学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ

(7) ICT を活用して児童が資料を共有したり、対面で会えない人と交流したりする機会を持つ。

この設問に「できた」と回答した教職員は前期 20.7%から後期は21.4%に、「概ねできた」と回答した教職員は前期 48.3%から後期57.1%になりました。学校生活のどのような場面で活用しているのかと言いますと、図形など黒板で作図が難しいものの投影、技能や技術を身に付けるための動画視聴、クラス独自のアンケート調査、学習内容の家庭での実践記録、家庭学習などでの使用です。家庭学習を e ライブラリで行い、子どものつまずきにいち早く気づいて対応できるようにした教員もいました。

しかし、もっと利用させたいのが、対面で会えない人との交流媒体としての活用です。そのために生駒市ではキャリア教育プランナーがその学校、その学年に応じたタブレット活用プランを立ててくれています。3 学期は 1 年生が「しごとをしろう」、2 年生が「想像力ゲーム」、4 年生が「バリアフリー」、6 年生が「平和を知る」「争いの起こりを知る」「広島を知る」「多様性カードゲーム」「考えを伝えあう」の授業をオンラインで学校外の人とつながりながら行いました。これらの学習内容は、当該校の教員がその全てを企画運営するのが非常に難しいです。来年度もキャリア教育プランナーと相談しながら、少しずつ内容を充実・拡大させていきます。

(8) ICT 支援員や指導主事による研修を学期に一度は実施し、教職員の ICT 活用能力を高める。また、学年会や特支担当会で ICT の効果的な活用を話し合い、自分の授業に取り入れる。

この設問に「できた」と回答した教職員は前期 17.2%から10.3%に、「概ねできた」と回答した教職員は 44.8%から55.2%になりました。合わせると、後期はこの質問に肯定的な回答をした教職員が65.5%です。

2 学期は 5 年生で算数の図形を学習した際、プログラミングの授業を行いました。また、社会科や家庭科、体育科にも活用範囲が広がっています。特別支援学級で使えるアプリ等も導入予定ですが、使用については教員の個人差によるところがありますので、週 1 度来校する ICT 支援員の協力を得ながら学校全体として活用の推進に力を入れなければならないと思いました。

3、地域と協働して活躍する人を育てる

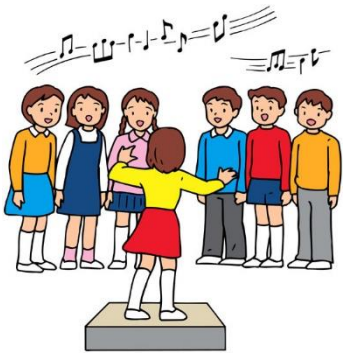
(9) 学校運営協議会や地域学校協働本部の意見を取り入れながら、地域と学校が相互に連携し、協働して行う様々な活動を実施する。

この設問に「できた」「概ねできた」と回答した教職員は55.2%で、前期の66.7%から 10 ポイント以上低くなりました。学校は「地域と同じ目の高さで議論し、行動できる組織」「実践を積み上げられる組織」を目指し、地域とのつながりに重点を置いた学習（郷土学習）を昨年度から本格的に始めましたが、それがまだ軌道に乗っていないことが分かります。もっと年度初めにどの教科でどのような内容の学習をするかを計画していく必要がありました。そのた

めに総合的な学習の時間の年間計画を今年一年間をかけて見直しています。地域の方からは「昔の遊びを教えたい。」「夏祭りに参加してほしい。」「里山保全活動をする小学生を募集してほしい。」「保護者と共に花の世話をしてくれる子はいないだろうか。」等の声がありますので、そのような声を学習に取り入れながら、郷土学習の拡大を図っていきたいと思います。

なお、新しい企画として、4 年生が、地域をよく知る方を学校に招いてインタビューしたり、日ごろ使っている中央公園の掃除をしたりしました。また、1 月末に全校児童は地元の未来会議のアンケートに答え、中央公園の活用について考える機会を持ちました。教員からは「以前のように地域の方を給食に招待して交流したい。」「クラブ活動で囲碁や将棋を教えてもらえないだろうか。」「芝生の管理をお任せしたい。」という意見がありましたので、スクール・サポート・スタッフに依頼して、できる活動を来年度は取り入れたいと思います。

4、学校運営

(10) 子どもたち一人一人に向き合うことができる教育を目指して働き方改革を推進する。クロックアウト時刻や綱紀やマナーを守ること、机上を整理して書類の紛失や業務の停滞を防ぐことなど、教職員が調和して学校教育活動に臨む。

この設問に「できた」と回答した教職員は前期 13.3%から後期は24.1％に、「概ねできた」と回答した教職員は前期 66.7%から後期は65.5％に、合わせると89.7％が肯定的回答をしています。働き方改革の第一歩は勤務時間の適正化です。超過勤務をなくすことで生み出した時間は、家庭生活や学校以外の社会とのコミュニケーションに使ってほしいと思っていますので、終業時間を全教職員で整え、事情を抱える人や効率よく仕事を終えた人が後ろめたい気持ちにならないようにしています。学校での超過勤務をなくすためには、①整理整頓をすること（物を探す時間が一番もったいない。）、②教材教具の共用や再利用をすること（常に自分好みのオリジナルでは無駄も多い。）、③放課後の業務を効率良く行うこと（雑談はほどほどにする。）、④優先順位をつけること（明日できることは明日に。）、⑤70 点主義でいくこと（100 点を求められる仕事はめったにない。）が大切であるそうです。全国的な教員不足の中、本校でも年度末に 3 名の欠員になり、大変難しい学校運営でした。次世代の教員を育成するため、教員の仕事にあこがれを持つ子どもを育てるために、全ての教員の人権や生活を守っていかなければならないと思いますので、これからも働き方改革は永遠の課題です。